

「第3回 くまもと戦争遺産の旅 ～本渡空襲と天草海軍航空隊をめぐる～」

7/30版

くまもと戦争遺産・文化遺産ネットワーク 代表 高谷和生

1 はじめに ～戦後77年の諸相、見学会に向けて～

- 第1・2回は、歩兵十三聯隊、合志市黒石原奉安殿、菊池飛行場とミュージアムを見学
- 熊日新聞主催「戦後70・75年企画 くまもと戦争遺産をめぐる旅」を企画
- 「学ぶ旅」のあり方、戦争遺産の学びは…
- 「ウクライナ戦争」の現実を見て…
- 一人ひとりが戦争遺産・遺産と向き合い「語り手」「継承者」として語り継ぐ
- 「くまもと戦争と平和のミュージアム（仮）」設立に向け

2 熊本の戦争遺産・遺産

(1) 戦争遺産とは

- 全国の戦争遺産は「約50,000」件、指定登録は「319」件
2021年10月2日現在
- 熊本県内の太平洋戦争期の戦争遺産総数は、多数の特殊地下壕を含めた「723件」
- くまもとの戦争遺産』内の一覧表には「224件」を精査し記載
- 熊本県内の指定登録文化財は国148件、県383件、市町村3,382件、国登録文化財156件の計2,382件



① 第1回戦争遺産の旅、菊池市指定文化財「花房飛行場給水塔」前で

(2) 西南戦争期の指定等

西南戦争遺産群（国指定、熊本市・玉東町）、明德官軍墓地（熊本市）、七本官軍墓地（熊本市）、花岡山陸軍埋葬地（熊本市）、旧輜重兵六聯隊衛兵所（熊本市）、有栖川の宮御督戦の地（玉東町）、篠原国幹戦傷の地（玉東町）、城の原官軍墓地（南関町）、肥猪町官軍墓地（南関町）、陣内官軍墓地（水俣市）、下岩官軍墓地（和水町）、高瀬官軍墓地（玉名市）、田浦官軍墓地（芦北町）、峰崎官軍墓地（芦北町）の計14件 ※県全域悉皆調査は、未実施

(3) 太平洋戦争期の指定等

「花房飛行場給水塔」（陸軍菊池飛行場高架水槽・菊池市指定有形文化財）、「永山の掩体壕」（陸軍人吉秘匿飛行場木製有蓋掩体壕・球磨郡あさぎり町登録文化財建造物）の2件。また、合志市の「黒石原飛行場奉安殿」は、保存修復事業を進めており、完了後に合志市指定文化財となる予定である。 ※地域の歴史を語るうえで「重要な遺産」との認識

(4) 熊本の「戦争の歴史」をたどる ※戦争遺産ガイドMAP

～熊本に残された戦争の傷跡「七大特徴」～

- ①軍都熊本市の軍事施設
～熊本城から東部の大江・渡鹿地区への軍施設の移転～
- ②九州で三番目に多い陸海軍飛行場
～正規飛行場、本土決戦に向けての特攻秘匿飛行場～
- ③東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所
～軍直営で石炭を原料とした黄色火薬の生産～
- ④三菱重工業熊本航空機製作所と学校工場・地下工場
～陸軍四式重爆撃機「飛龍」の生産～
- ⑤本土決戦に向けての天草地区砲台、震洋等の特攻艇基地と兵站基地としての人吉地区の飛行場・地下工場・地下壕群
- ⑥県内各地に残る空襲・戦災の「被害の歴史」
- ⑦朝鮮人や中国人、連合軍軍俘虜労働者、敵機捕獲搭乗員への「加害の歴史」



② 戦後75年戦争遺産をめぐる旅、荒尾二造「変電所」前にて

3 本渡（楠浦）空襲と墜落米軍機

※啓発リーフレット『空襲下の熊本』

(1) 空襲を受けた熊本造船所

天草郡楠浦村掛場に、「1941（昭和16）年、株式会社熊本造船所が立地した。当初は、八代で開所予定であったが、肥州窯業株式会社及び南九州窯業株式会社の土地を買収し、塩浜跡地などを含め海岸を埋め立て、翌年工場用地が竣工した」（株）熊本造船所大門工場は、昭和18年に国から軍需用木造船建設（木造輸送船）の指定を受けた。従業員は、最盛期には600人を越えていた」という。『楠浦町誌』より



③ 熊本造船所初の木造戦時標準船進水式 『大凡荘夜話』より

『大凡荘夜話』によれば「木造船会社としては全国の七大造船所の一つに数えられるほど大規模なものであり、150～300トンを建造する造船台5台」があったとされる。

また、**辺田千穂美さん証言では、「熊本造船所への空襲は2回あり、2度目は爆弾と機銃掃射の攻撃で、社屋・工場建物が焼けて隣接する自宅にも火の粉が降ってきた。その折りに隣の借家に住んでいた阿蘇出身の「山口さん」のご主人（当時45歳前後・フルネームはわからない）が機銃掃射で被害にあい、亡くなられた。丁度お盆の前日（8月14日）のことだったので、良く覚えていいる。終戦間際の事で、葬式があった記憶もない。何時のまにか奥さんは転居された。山口さんの奥さんは「墜落した米兵を一度竹やりで突かせてほしい」と懇願されたが、それはかなわなかったという。さらに空襲資料として、本渡歴史民俗資料館に「船舶内ベッド板」に12.7mm機銃弾の貫通痕跡資料が保管されている。**

(2) 墜落機体及び墜落機搭乗員

□墜落機体：North American「P51」Mustang

□搭乗員：**CHAELES. L. BURMAN (ブルマン) 中尉**

楠浦村字実ケ浦（さねがうら）共同墓地埋葬

□所属部隊：第5航空軍第5戦闘機集団第35戦闘機群団第40戦隊

□機体番号：44-63335

□墜落日：1945年8月14日午前11時頃

□墜落地：熊本県天草郡楠浦村（現・天草市楠浦町：くすうら）大字舟津（ふなつ）海岸沖
※POW研究会「本土空襲の墜落米軍機と捕虜飛行士」より

(3) 墜落の「P51・マスタング」機

P51マスタングは「第2次世界大戦中に開発された米軍戦闘機で、最も完成度の高い機種とされる。全長9.8メートル、全幅11.3メートルのコンパクトな機体に、離昇出力1490馬力のパカード・マーリン液冷V型12気筒エンジンを搭載、最大で時速703キロというレシプロエンジンでは極限のスピードを実現した。空気抵抗の小さい層流翼を採用、空力的に洗練されたボディで、さほどパワーの大きくないエンジンにもかかわらず、高速と強い上昇力、さらに最大3700キロという長い航続距離を実現した。戦略爆撃機の長距離護衛からロケット弾を搭載した地上攻撃まで幅広い任務をこなし、各型合計でおよそ14800機が生産された」時事通信社の「米空軍機」より

沖縄移駐の陸軍部隊に装備された機体はD型機で、これは

高高度性能向上のためロールスロイス社V-1650-7エンジンに転換したもので、併せて課題となっていた後方視界について、コックピット後部胴体を低くし、新たにホーカータイフーンで採用されていた**枠の無い水滴型キャノピー（バブルキャノピー）**を取りつけた機体である。また装備は12.7mm機関銃を増設し、計6丁の機関銃を主翼に装備していた。また対地攻撃用HVARロケット弾も翼下に装備。

(4) 第5戦闘機集団第35戦闘機群団第40戦隊と墜落機

米軍が沖縄に上陸して以降、日本軍の組織的抵抗が終わる前から米軍側は旧日本軍飛行場を直ちに整備し、6月には本格的に米陸軍極東航空軍が移駐を開始。

極東航空軍は、第5・7航空軍から成り、所有する戦闘機のタイプ別（P38・P47・P51）に8個群団を構成していた。墜落機はP51で編成された「**第5航空軍第5戦闘機集団第35戦闘機群団第40戦隊**」所属機である。

この第40戦隊の8月戦闘報告では、攻撃地点は鹿児島県油津、宮崎県富高、熊本県八代、鹿児島県栗野等で、GP爆弾及び機銃掃射による攻撃、**8月14日は「Honda（本渡か？）海へのGP爆弾と6600発の機銃掃射」が行われた。**

また8月14日の項には、**該当機が「対空砲火を受けて水面へ墜落」**したと記載されている。



④ 欧州戦線のP51D型機

資料②：国立国会図書館デジタルコレクション

「Operations against Kyushu targets during July and August 1945」より

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/4009325>

54 コマ目、55 コマ目

SPECIFIC TARGET				RESULTS		GENERAL TARGET	
DATE	GROUP	LOC. NAME	REMARKS	% DESTROYED	% DESTROYED	GENERAL TARGET	% DESTROYED
Jul 5	40th	16	ammo Kyushu-4 A/C (George) dest. 8335 (50) expended.				
Jul 16	"	"	ammo Iwakuni-6 barges damaged, 3500 (50) expended.				
Jul 16	"	"	ammo Kokubunji-2 barges, 2 SDBs damaged, 3300 (50) expended.				
Jul 17	"	"	GP bomb, 1 lugger damaged, 1500 (50) expended.				
Jul 17	"	"	GP bomb, 1 lugger damaged.				
Jul 18	"	"	ammo Kunitakuni-9 trains dest. 5200 (50) expended.				
Jul 27	"	"	ammo Haganaka-16 trains dest. 5730 (50) expended.				
Jul 29	"	"	GP bomb-Sydney report.				
Aug 3	"	"	3-7				
Aug 5	"	"	3-7				
Aug 7	"	"	ammo Kurima-10 trains dest. 4515 (50) expended.				
Aug 7	"	"	GP bomb Yatsushiro - 1 heavy bridge dest. 5 trains dest. 1975 (50) expended.				
Aug 12	"	"	ammo Aburatsubo - 2 SDB damaged, 6190 expended.				
Aug 12	"	"	ammo Tomioka - 1 train, 3 vehicles dest. 4975 expended.				
Aug 14	"	"	GP bomb SE of Honda - 4 SDB damaged, 6600 expended.				
Aug 14	"	"	147 sorties, 25,23 tons of bombs, 52,160 ammo expended.				

SORTIES & TOT				RESULTS		ABRUPTION		BRIDGES		TRAINS		VEHICLES	
DATE	GROUP	LOC. NAME	REMARKS	% DESTROYED	% DESTROYED	ABRUPTION	% DESTROYED	BRIDGES	% DESTROYED	TRAINS	% DESTROYED	VEHICLES	% DESTROYED
Jul 5	40th	16	4 George	8,335	50								
Jul 16	"	"	2 SDBs 3000	3,500	50					1			
Jul 17	"	"	1 lug 3,75	1,500	50					9			
Jul 18	"	"	1 lug 3,50	5,200	50					26			
Jul 27	"	"	2 SDBs 3000	5,730	50								
Aug 3	"	"	2 SDBs 3000	4,515	50								
Aug 5	"	"	2 SDBs 3000	4,975	50								
Aug 7	"	"	4 SDBs 6000	6,600	50								
Aug 12	"	"	2 SDBs 3000	6,190	50								
Aug 12	"	"	2 SDBs 3000	4,975	50								
Aug 14	"	"	4 SDBs 6000	6,600	50								
Aug 14	"	"	147 sorties, 25,23 tons of bombs, 52,160 ammo expended.										
Aug 14	"	"	147 sorties, 25,23 tons of bombs, 52,160 ammo expended.										

⑤ 第40戦隊戦闘報告（抜粋） 国立国会図書館所蔵

(5) 墜落機資料

墜落地点に隣接した共有管理地「五色島（こしきじま）」の松の木に、墜落機破片が突き刺さり、その後この資料を楠浦コミュニティセンター（旧楠浦公民館）で保管されている。金属片は「リベット留めジュラルミン製部材片」で、約10cm方形。表面には焼け焦げた跡やめくれ破碎した状態が見え、墜落時の衝撃の激しさを感じさせる。部材は平面状で、端部形状も確認できるが、機体部位の特定には結びつかない。本資料を公民館に寄贈した方・経緯を調査中。



⑥「五色島の松」に刺さった墜落機ジュラルミン片

(6) 証言等による墜落情況、米兵の埋葬、墓地部隊による遺体引き取り

- ①「佐伊津（さいつ・天草市本渡・墜落地点まで約6km）の天草海軍航空隊からの高射砲か、志柿港（しがき・天草市志柿・墜落地点まで約5km）に停泊していた艦船の機関銃に撃たれて、瀬戸海峡（上島と下島の間）の間をフラフラして落ちてきた」「機体は北から飛んできて、五色島の手前の海に落ちた」
- ②墜落地点は、五色島と船津港の間で、水深が深かったことから、船津の漁師が網を打って機体は蛭子の浜（えびすのはま）海岸に引きあげた。また、乗員遺体も操縦席から網であげた。墜落機には「操縦席に遺体はそのままあり、大きな損傷はなかった」。墜落時に港停泊の船舶のマストに機体を引っ掛け「水平尾翼」が現地に落下した。その部品は近くの防空壕内に置かれていたが、鉄材として売られた。
- ③「米軍機の遺体は、蛭子の浜（えびすのはま）海岸にあげ、その後村の縁故者のいない者対象の共同墓地・向山（むこうやま）実ヶ浦（さんねがうら）に埋葬した」「翌々年、進駐軍将兵3人が訪れた際には、仏式の回向の儀式として、埋葬地を結界し蝋燭や香花をたむけお経をあげると米兵は感動した」「米兵は当初シャベルで掘ったが、遺体が傷つかないようにほとんど素手で丁寧にあつかった」
- ④進駐軍が遺体を引き取りにきた時、その様子を見に行った。米兵は4～5人おり、「村長をはじめ村幹部は10名ほどおり、紋付き袴の姿で対応した」、「当初米兵は、ピストルを抜き威嚇していた」「実ヶ浦（さんねがうら）の無縁墓から遺体を掘り起こし、米兵は担架に乗せられ、里道を通り村の巡査の家に一旦運ばれた」
- ⑤宗心寺の横に、ジープに乗った米兵2人が遺体回収に来た。怖かったが、近くで見ていると大柄で背の高い米兵が遺体の入った「大きなリュック（遺体回収袋か）」を両腕に通し、「ヒョイ」と軽やかかえて、それをジープに乗せた。
- ⑥戦後2年程経った頃、ジープに乗った青色の帽子をかぶった米兵2人が、下浦小学校を訪れ、授業の様子を見にきた。「墨塗教科書の様子を確認にきた」「楠浦（墜落機米兵の遺体回収時か）から回ってきた」と、後で大人から聞いた。

(7) 本渡空襲は本土決戦に向け「楠浦の軍需工場等を含めた本渡全域への攻撃」である。

4 天草海軍航空隊、富岡水尻砲台、米海兵隊撮影の新発見写真21枚

(1) 天草海軍航空隊基地跡

※啓発リーフレット『進駐軍の見た熊本』

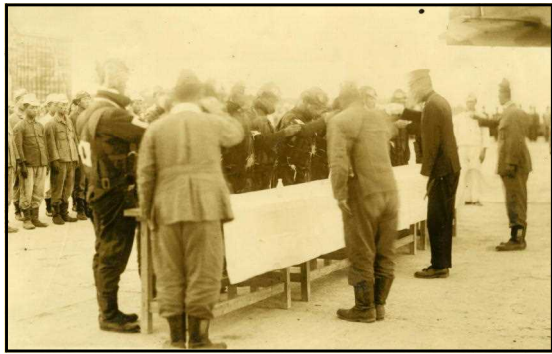
天草海軍航空隊は天草市佐伊津に所在する。「佐伊津・御領」飛行場の別称があり、水上機専用の飛行場である。旧通信省天草地方航空機乗員養成所（海軍系）として、開所準備が完了したところで、全施設を海軍が接收。昭和19年3月に第十二連合航空隊博多海軍航空隊天草分遣隊として当初は整備教育隊として発足したが、その後は水上機操縦の教育も行った。昭和17年頃より地元中学生や住民の勤労働員、徴用された朝鮮の人々も建設に投入された。

その後昭和20年3月1日、天草海軍航空隊として独立、第5航空艦隊第12連合航空戦隊に編入。保有機は米軍への引渡目録によれば九三式水上中間練習機36機、九四式水上偵察機3機、九五式水上偵察機15機、零式水上観測機7機、二式水上戦闘機3機の計64機であった。

5月5日練習航空隊の指定を解き、第5航空艦隊第12航空戦隊の所属となった。

昭和20年の沖縄戦においては第一次攻撃隊が5月24日2機、第二次攻撃隊が6月21日に5機、7月3日に1機の零式水上観測機での特攻作戦を実施し、計8機・16人が特攻死されている。





- ⑦戦闘指揮所前に集合した搭乗員と零式水上偵察機
 ⑧本部前での集合写真 ⑨6月21日特攻隊出撃の水盃
 以上3点は、天草アーカイブス所蔵
 ⑩旧天草海軍航空隊跡に建立された「慰霊碑」
 ⑪水上機滑走台「斜路」側面部 ⑫地下発電所壕の内部

本部跡の高台には、沖縄作戦で亡くなった隊員の「特攻慰霊碑」が戦後まもなく結成された「天空会」により、1973（昭和48）年に建立されている。

(2) 富岡水尻（みっちり）砲台

富岡半島の北端の四季咲岬公園・富岡灯台に向かう狭い道を海まで進むと、道路横の民家庭先に隠れるようにしてコンクリート製の海軍海面砲台が現れる。この地富岡は、近世以降天領支配の中心となった土地で、富岡城の築城をはじめ、その要害の地形から、戦争中は海軍砲台指揮本部・水尻海面砲台・元袋震洋基地・防空監視部隊（甲・特設見張所）と陸上守備の独歩第七五七大隊が配置され、お互いに有機的に連動要地防衛を行っていた。

1号砲台はコンクリート敷設で四十五口径十一年式十二糎（センチ）砲が1門設置され、天井部に砲設置時の鉄輪3個が残され、奥右側面には出入り口も設けられている。

2号砲台はさらに20m程上がった崖面に素掘りで壕内部を松材で補強して設置された。その中間地点には弾薬庫と兵器庫が同様の構造で、L型に屈曲させ、壕が掘削されたが、現況は痕跡も残されていない。

その当時の事をよく知る1号砲台横の住人の故松本高八さんは「砲は沖の船から小舟に乗せて、付近の住民総掛かりで陸にあげた。終戦になって、進駐軍が来て、ダイナマイトを仕掛けて爆破しにこらした。上の砲は一発で壕ごとひしゃげてしまったばってん、下の砲は壊れんじゃったけん、2回目は砲にダイナマイトを巻き付けて爆破させらした」と証言された。

2号砲台の上位の畑地は観測用の測距儀と対空用の25^{mm}機関銃も上段の平場に設置され、砲員60名が寄宿する三角兵舎も付近の道沿いに造営された。記録では第一〇三分隊白庄司清少尉部隊と想定される。



⑬富岡水尻1号砲台の現況

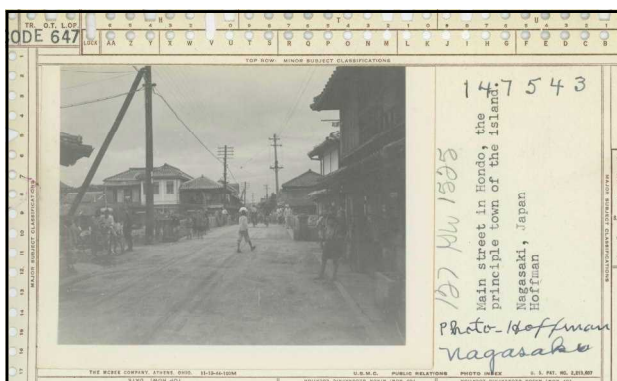
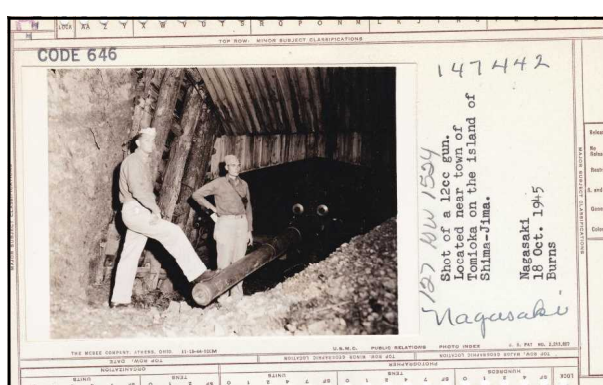
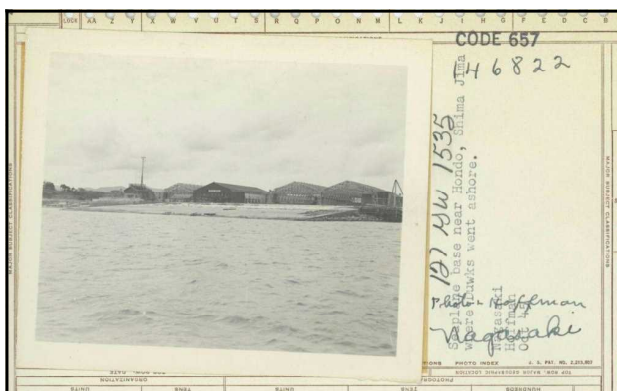
(3) 撮影概要と接收状況

本項撮影資料21枚の内訳は、本渡町内2枚、天草海軍航空隊11枚、富岡水尻砲台4枚、鬼池・四十七糎砲各1枚である。ただし⑭天-1、⑮天-2は、天草下島渡海前の長崎県南島原市口之津町での1945年10月18日の撮影である。島原鉄道口之津駅前・林田旅館前での撮影で、当時波止場

の前でもある。早崎海峡は全4.2km、当時の「機帆船（880ト程度）」で、約40分程度で対岸の鬼池港まで達していた。海兵隊水陸両用車（DUKWS・通称“アヒル”）に、附属の起重機を使い「半島を離れる（渡海前）にジープを搭載」している様子である。

天草海軍航空隊に関しては、⑩天-3は天草海軍航空隊施設の全景を写した初めての写真で、しかも海からの貴重なカットである。現存するスリップ状況、格納庫4棟の配置と併せ前線指揮所構造等も理解できる。⑪天-5の格納庫内への零式水上観測機接收前状況写真に代表される様に、これら飛行機部品等接收前状況の一連写真は貴重である。アジア歴史資料センター蔵『天草海軍航空隊 引渡目録』との突き合わせ作業で、一連の米軍接收作業状況が想定できる。

また、本土決戦のため設置し、一部が現存する「富岡水尻砲台」関連写真⑬・⑭天-9～12は、地元での過日証言とも整合する。熊本県内で来たるべき本土決戦準備に向け、海峡封鎖を目的とした、平射海面砲台の構造を理解することができる。⑮天-8は、本渡町の当時様子である。



- ⑭島原口之津駅前での海兵隊水陸両用車「DUKWS」
- ⑮林田旅館前のDUKWSと搭載されるジープ
- ⑯「天草海軍航空隊基地」海からの全景
- ⑰格納庫内収納の「九五式水上偵察機（アマー-22）」
- ⑱富岡水尻1号砲台の全景
- ⑲富岡水尻2号砲台での米兵と接收様子
- ⑳天草市本渡の「町山口川と本渡橋」の様子